

徳とは何か

2020. 8. 17

「徳」という言葉がある。今の時代は、損得の得ばかりが優先されているようにも思うが、この「徳」は人間に本来備わっている天性の種のようなものであり、それをどう育てていくかで現在や未来が変わっていくものだと考える。

松下幸之助氏は、「人間として一番尊いものは徳である」といっている。本田宗一郎氏は、「人間にとって大事なことは、学歴とかそんなものではない。他人から愛され、協力してもらえようような徳を積むことではないだろうか。そして、そういう人間を育てようとする精神なのではないだろうか」という。

吉田松陰においては、「士たるものの貴ぶところは、徳であって才ではなく、行動であって学識ではない」という。論語や老子、修身など学問をする者たちにとって、この「徳」は中心に置かれその「徳」を歩むことこそが人間の道であるともいう。

しかし、その「徳」はどのようなものか文章に書きなさいということになるとはっきりしない。松下幸之助氏も次のように語っている。

君が「徳が大事である。何とかして徳を高めたい」ということを考えれば、もうそのことが徳の道に入っていると言えます。「徳というものはこういうものだ。こんなふうにやりなさい」「なら、そうします」というようなものとは違う。もっとむずかしく複雑なものです。自分で悟るしかない。その悟る過程としてこういう話をかわすことはいいわけです。「お互い徳を高め合おう。しかし、徳ってどんなものだろう」「さあ、どんなものかな」というところから始まっていく。人間として一番尊いものは徳である。だから徳を高めなくてはいかん、と。技術は教えることができるし、習うこともできる。けれども、徳は教えることも習うこともできない。自分で悟るしかない。

この徳は、頭や知識で理解するものではなく心境によって学ぶものである。ただよいことをしたら徳かといえばそうではなく、徳は目には見えないものだからこそ心で悟るしかない。

老子は、徳にも最上の徳があるといい、それをこう表現している。

徳のある人は自分の徳を意識しない。それは徳が身についているからだ。徳のない人は徳を意識するため、なかなか身につかない。だから、最上の徳は無為であり、わざとらしいところがない。低級な徳は有為であり、わざとらしいところがある。

この「徳」とは、人間でいえば真心のことであり、思いやりのことであろうか。真心や思いやりは決して単なる知識や学識を語るだけで実現するものではない。行動と実践によって実現するものである。

真心を発揮していくことこそが「徳」であり、真心で生きることではじめて本来の「徳」を積むことができるように思う。誰かのために、大切な人のために、自分の保身を入れず誠心誠意尽力していくことで顕在化してくるものなのかもしれない。「徳」を悟るには、この真心の実践の場数を積み重ね自分自身が仁徳を身につけていくしかない。だから、この道には決して終わりが無い。そう思う。道は果てしなく遠い。